

世親、ダルマキールティの滅無因説と中観派

——自立論証派と帰謬論証派の見解の相違——

森 山 清 徹

諸存在が減するには外的な原因が必要であるとする、例えば薪が減するには火が因となる、あるいは壺の破壊の原因としてハンマーを想定する滅有因説に対し、諸存在は自ら減する本質（自性）を有するのであり、それ自身以外に外的な滅する原因を必要とするのではないという滅無因説がある。前者は仏教の正量部やミーマーンサー学派、ニヤーヤ学派の Uddyotakara (c. 550-610) らが、他方後者は Vasubandhu, Dharmakīrti らにより主張された。ここでは以下の二点を結論として導きたい。

1. 中観自立論証派の Bhāvaviveka と帰謬論証派の Candrakīrti とでは Vasubandhu (*Abhidharmakośabhāṣya*, AKBh) の滅無因説に対する見解が異なり、Bhāvaviveka は、Vasubandhu の見解により滅無因説を取る事が知られる。他方、Candrakīrti は Vasubandhu のみならず Bhāvaviveka の見解をも批判し、滅有因説を唱える。
2. 後期中観自立論証派の Śāntaraṣita, Kamalaśīla が *Tattvasaṅgraha* (TS), 及び TS-Pañjikā (TSP) 第八章で滅無因説を展開している¹⁾。そこでの見解は Dharmakīrti の *Pramāṇavārttikasvavṛtti* (PVSV) と *Hetubindu* (HB) で展開される滅無因説に基づいている。以上の二点を中心に検証する。

1-1. Vasubandhu の滅無因説に対する Bhāvaviveka と Candrakīrti の見解

Bhāvaviveka は *Prajñāpradīpa* (PPraD) で Vasubandhu の見解を引用する²⁾。

yo' pi āha nikāyāntariyo vināśakāraṇaṃ prāpyānityatā vināśayatīti tasya harītakīm prāpya devatā virecayatīty āpannaṃ bhavati kiṃ punas tām kalpayitvā / tata evāstu vināśakāraṇāṇ vināśaḥ (PPraD, D204b3-5=AKBh p.79, 10-11)

ここでの対論者は、Yaśomitra 及び漢訳『般若灯論』のよれば、正量部 (ārya-Saṃmatīya) であるが、彼等の主張は〈滅が因を獲得して無常性が [存在物を] 滅する〉、それに対し Vasubandhu の答論は〈彼が下剤を服用して神が下痢させるといことになる。そう考えれば、どうかというと、滅は滅因から起こることになり、[無常性は不要となる].〉この Vasubandhu の見解を Bhāvaviveka は承認し『中論』

XXI. v. 4 を解説している。他方、Candrakīrti は、*Prasannapādā* (PrasP) に於いて vināśāś cābhāvah / yaś cābhāvas tasya kim kartavyam / so'sāv ākasmiko vināśo (AKBh p. 193,7-8) = vināśo hi nāmābhāvo, yaś cābhāvah kim tasya hetunā kartavyam / ato nirhetuko vināśa iti // nanu ca bhāve'pi hetvabhāvaprasaṅgo bhavati / (PrasP p.174, 1-2)

Vasubandhu の見解〈滅は非存在である。非存在であるものに、因によって何がなされようか。その滅は因に依存するものではない〉を批判している。すなわち〈存在にとっても、因が存在しないことになる〉と反論する。

1-2. Bhāvaviveka の滅無因説と Candrakīrti のその批判

yac coktaṁ na sahetuko vināśo 'vināśavattvād yathā asaṁskṛtam iti (PPraD D205a2=PrasP p.414, 2-3)

Bhāvaviveka は、滅無因説を〈(宗) 滅は因を有するものではない。(因) [他] の滅を具えたものではないから。(喩) 例えば、無為なるもののように〉と論じ、滅を無為 (他の因により設けられないもの) に準える。他方 Candrakīrti は、Bhāvaviveka の示す論拠を対立 (virodha) であると批判する。なぜなら〈滅無因を立証するのと同様に、有為なる特徴の無なること (saṁskṛtalakṣaṇatvābhāva) をも立証する〉また〈滅が行蘊 (saṁskāraskandha) 及び縁起の支分に含まれることとも対立する〉(cf PrasP p.414, 3-5.) というのである。このように Candrakīrti は Bhāvaviveka の滅無因説を批判し、滅有因説を取る。この滅因を巡る見解の相違は次の点にある。Bhāvaviveka は滅を無為に準えるに対し、Candrakīrti は有為 (他の因により設けられたもの) に含める点で、前者は滅無因、後者は滅有因説を取り、対照的な見解を示す。

1-3. Bhāvaviveka の滅有因説批判と Candrakīrti の滅有因説擁護

yas tu sahetuko vunaśaḥ saṁskṛtalakṣaṇatvād utpādavad iti (PPraD, D205a3=PrasP p.412, 12)

(宗) 滅は原因を有する。(因) 有為なる特徴のものであるから。(喩) 生起のように。

Bhāvaviveka は、この論拠を不定 (anaikāntika) とする。その根拠として [阿羅漢の] 最後の心、心所を提示する。この根拠も Vasubandhu が阿羅漢の最後の心は意であるが、等無間縁として機能するものではない³⁾、というものに等しい。(cf AKBh p.99, 14-17 PV II 45,46. TS 1914-1918)

他方、Candrakīrti は、その論拠を不定 (anaikāntika) ではない (PrasP p. 413, 1-2) とし、滅有因説を支持する。その根拠は次の点に等しい。〈生起によって老死があり、また作られた (saṁskṛta) 特徴を有するものは、行蘊 (saṁskāraskandha) の中に含まれると述べられる世尊は、滅が原因を有すること (sahetukatva) を明白に提示しておられる (PrasP p.173, 8-12)〉つまり、滅は作られたものであり、作られた

ものは原因を有する。したがって滅も原因を有するものとし、また阿羅漢の最後心を必ずしも等無間線にあらざるものとはしない。（PrasP p. 314, 3-6）

Śāntarakṣita, Kamalaśīla の TS TSP 第八章 vv. 354-384 における滅無因説の大部分は Dharmakīrti の PVSV, HB での滅無因説に基づくものである。Dharmakīrti は、〈滅無因の根拠を滅は存在物の自性 (bhāvasvabhāva) であり、自己の因 (svahetu) により自ら起こり (PVSV p. 141, 20-21) 他の因に依存することがない (PVSV p.98, 7-9)〉その根拠は他なる滅因の作用があり得ない点に求められ、さらに滅無因の根拠として〈滅は非存在 (abhāva) である。非存在は結果 (kārya) ではない (PVSV pp.142, 26-143, 1, TPS ad TS 363-364)〉〈一刹那のみ存在し、無間に滅する (PVSV, p.145, 5-6) ことを示す。これらの理論は基本的には Vasubandhu, Yaśomitra にも見られるものである (AKBh p. 193, 6-18)。他方、Dharmakīrti の特徴は、〈滅を単純否定 (prasajyapratishedha) としての非存在 (abhāva) と規定し、そのことを根拠に滅因に作用のないことへと導き滅無因を論じる〉点にあると思われる。それを Śāntarakṣita, Kamalaśīla は継承している。この点を以下具体的に示そう。

2.

[A-1] PVSV pp.98, 4-100, 24 に対応する⁴⁾

[0] TS 353: 滅無因に関する総論

tatra ye kṛtakā bhāvās te sarve kṣaṇabhāṅginah / (TS 353ab), 作られたもの全ては刹那滅である。cf yat kimcit kṛtakam tat sarvam anityam (PVSV p.97, 19-20)

[1] TS 354-355: 作られた諸存在 (kṛtakā bhāvāḥ) の滅は、自己の因 (svahetu) に基づいて起こり、滅に関して、全ての作られたものは他の因 (hetvantara) に依存していない (anapekṣatā) のものとして確定している。これは、同一性の立証因 (svabhāva) に基づいて

滅に関して他の因に依存しないものは、必ず滅するものである。例えば、直後に結果を設ける (原因の) 総体は、[他に依存することなく] 必ず結果を生起する。(遍充関係) 作られた (kṛtaka) 諸存在は、滅に関して他の因に依存しないものである。(論理的根拠) [作られた諸存在は、必ず滅するものである。(結論)] (TSP ad TS 354-355)

cf na hi bhāvā vinaśyantas tadbhāve hetum apekṣante / svahetor eva vinaśvarāṇām bhāvāt / tasmād yaḥ kaścit kṛtakaḥ sa prakṛtyaiva naśvaraḥ / (PVSV p.98, 7-9)

[2] TS 356: 対論者は、滅に関して他の因に依存しないとしても、一定期間とどまっただけで、その後の別の時間と場所に依存している存在も滅し得ることを根拠

に、すなわち時間と場所に依存性を有するものも滅し得るから、先の推論の因は不定 (anaikāntika) であると指摘している。それに対し、不定因でない旨を次のように示している。〈滅に関しては他の因に依存することのない [諸存在が]、ある時 (kadācit) ある場所 (kvacit) で起こるということであれば、時間や場所にまで全く依存しないというわけではない。〉 (TSP ad TS 356) この点は Dharmakīrti の次の見解に等しい。

cf yo hi svabhāvo nirapekṣaḥ sa yadi kadācid bhavet kvacid vā tatkāladravayāpekṣa iti nirapekṣa eva na syād ity uktam / (PVSV p.99, 21-23=TSP p.168, 13-15)

[3] TS 357: 滅に関して他の因に依存しないということは、さらに他の因が何の作用もなし得ないという点から根拠付けられる。また、時間と場所に依存しているから、立証因は不成 (asiddhatā) であるとの反論に対して〈滅の因は、存在しているものに対して、何らの作用もしない (akiñcitkaratva)。 (357)⁵⁾ すなわち利益を与えることがない (anupakāritva)、利益を与えないものに依存することはない。 (TSP ad TS 357)

cf tathāpy ayam akiñcitkaraḥ kimiti apekṣyata iti siddhā vināśam praty anapekṣā bhāvasya / (PVSV p.100,18-19) cf PVSV p. 148,15-16

[A-2] PVSVpp.141,17-150,5, HB pp.717-19,13 に対応⁶⁾

滅の因が何らの作用もなさない根拠が、以下の次第に基づいて吟味される

[4] TS 358-359: ある時に設けられる滅とは、[4-1] 実在 (vastu) であるのか、それとも [4-2] 非実在 (avastu) であるのか。実在であるなら滅の因 (vināśahetu) により滅は設けられたものとなる。その場合、滅は滅の因 (ex. 火) を有する存在 (ex. 薪) と [4-1-1] 別でないもの (anarthāntarabhūta) であるのか、[4-1-2] 別なもの (arthāntarabhūta) であるのか。Dharmakīrti は PVSV vv. 269cd-273 で同じ選択支のもとに論述している。cf astu vāgniḥ kāṣṭhavināśahetuḥ / sa vināśo 'gnijān mā kim kāṣṭham eva āhosvid arthāntaram / (PVSV p.142, 4-5) [訳:] 火が薪の滅の因であるとするなら、火 [滅の因] から生起するその滅は [4-1-1] 薪 [滅の因を有するもの] そのものであるか、あるいは [4-1-2] 別なものであるのか。 [4-1-1] TS 358-359: 滅の因 [火] が、存在 [薪] と別ではない (anarthāntarabhūta) 滅をもたらすものであることは不合理である。存在 (薪=滅) の自性は自らの因 (svahetu) によって起こるからである。 [したがって、滅は自ら起こることになり、汝の見解に矛盾する。] (TS 358)

cf anarthāntarabhūto vināśaḥ kāṣṭhāt / tad eva tad bhavati / (PVSV p.144,4)

cf na hi nāṣo bhāvānām kutaścīd bhavati / tad bhāvasvabhāvo bhavet / bhāvasyaiva svahetubhyas taddharmaṇo bhāvāt / (PVSV p.141,20-21) [訳:] 諸存在の滅は何らかの[滅の因から]生起するのではない。したがって、[滅とは]存在の自性であろう。存在自体が自らの因によって、その(滅)という属性を有して生起するからである。滅とは別ではない存在[薪も]自らの因によって起こり、他の因を必要としない。 (PVSV v.273)

[4-1-2] TS 360-361: 滅と呼ばれるものが、[薪と] 別なもの (arthāntarabhūta) として設けられるとするなら、諸の別の因 (火) によってその存在 (薪) に、いかなるものもたらされることはない。したがって (薪という) 認識の結果は、以前のものである。またそれ (薪) は同じ状態にとどまっているから [別なものである滅によって薪が] 妨げられる (āvaraṇa) などということも、起こり得ない (TS 360-361)。Dharmakīrti は PVSV, v. 269cd-271ab: 滅と薪が別である場合、別でない場合を吟味している。[薪と] 別のものが滅するなら、[薪は同一状態にある故] 何故、薪が認識されないのか (PVSV, v.270cd)。別なものによって [薪が] 妨げられることはない (PVSV, v.271ad)。

[4-1-3] TS 362: 存在とは別な滅という名称 (nāśanāman) によって存在 [薪] が滅ぼされることはない。 (cf anyo' nyasya vināśaḥ / na hi kasyacid arthasya nāmakaraṇamātreṇa kāṣṭam na dṛśyate iti yuktam PVSV p.142, 14-15)

[4-2] TS 363-364: 滅因により設けられるとされる滅は非実在 (avastubhūta) でもない。非実在は生ぜしめられる自性をもたない。

TS 363a, 364ab: 滅とは存在 [=薪] が非存在となること (bhāvābhāvātma) である。非存在が結果であるならば、まさしく実在性 (vastutā) を有する。cf kāṣṭavināśa iti ca kāṣṭhābhāva ucyaṭe / na cābhāvaḥ kāryaḥ / (PVSV pp.142,26-143,1) 薪の滅とは、薪 [=存在] が非存在となることであるとされる。非存在は結果ではない。

[4-2-1] TS 365: 滅因によって設けられる非存在 (abhāva) としての滅は相対否定 (paryudāsa) ではあり得ない。滅因を有するもの [存在, 薪] と滅とが別であるか、別でないか、ということに関する過失が再び起こってくる。cf PVSV, v. 277ab: 同じ選択支が再び起こる。PVSV, v. 277cd: 滅は相対否定ではない。cf [6-2]

[4-2-2] TS 366: 滅によって設けられる非存在 (abhāva) としての滅は単純否定 (prasajyapratishedha) としてもあり得ない。滅因には何らの作用もない。

〈というのは、単純否定であれば、否定辞は karoti と結びつくから非存在となる。存在を設けない故、作用は否定されるから、滅因には行為者としての性質がないと理解されよう。----それ故にいかなる滅の因も存在しない。tathā hi prasajyapra-

ṣedhe sati nañañ karotinā sambandhād abhāvaṃ karoti /bhāvaṃ na karotīti kriyāpratīṣedhād akartṛtvam nāśahetoḥ pratipāditam bhavet ---- ity ato na vināśahetuḥ kaścīt. (TSP ad TS 366)》

cf tasmād abhāvaṃ karotīti bhāvaṃ na karotīti kriyāpratīṣedho ' sya kṛtaḥ syāt / tathāpy ayam aki-mcitkaraḥ kimiti apekṣyata iti siddhā vināśam praty anapekṣā bhāvasya / (PVSV p. 100,17-20 ad v. 196sb asāmarthyāc ca tadhetoḥ)

bhāvapratīṣedhaikarūpatve bhāvaṃ na karotīti syāt, evam cācartur aheturvam iti na vināśahetuḥ kaścīt. (HB p.8*4-6)

Dharmakīrti は、滅因にいかなる作用もあり得ないことの根拠として、滅を単純否定としての非存在 (abhāva)、したがって結果ではないと規定する。(PVSV p.146, 1, pp. 142,26-143,1) prasajyapratīṣedhā の観点から滅因の無作用を論じる点は Dharmakīrti の Vasubandhu には見られない新展開といえよう。

[5] ニヤーヤ学派からの反論

[5 - 1] TS 367-369: Aviddhakarṇa は滅有因を三つの根拠に基づいて主張する。すなわち、(a) 滅はある時に生起するから (kādācitkatvāt), (b) 滅は実在 (vastu) が生起した直後に存在するものとして仏教徒により認められているから、(c) 滅は以前に存在していない本質を獲得するものであるから。

[5 - 2] TS 370-372: Uddyotakara は次のディレンマにより滅無因論に反論する。滅は無因ということであれば、滅は (1) 石女の息子などのように非存在 (asat) であるか、(2) あるいは虚空のように常住 (nitya) であるかである。

[5 - 2 - 1] TS 371: 第一の場合であれば、あらゆる存在は常住ということになり、諸行は滅するものである (sarvasaṃskāraṇāśītvā) ということは根拠をもたなくなる。cf PVSV v. 275

[5 - 2 - 2] TS 372: 第二の場合であれば存在が滅と共にあることになる。また滅は常住であるから、生起していないものが滅するということになり、それは不合理である。cf PVSV v. 274

[6] : [5] ニヤーヤ学派からの反論に対する答論 TS 373-384

[6 - 1] TS 373: 二種の滅のうち〈刹那の間存続する属性 (kṣaṇasthitidharman) を有する存在 (bhāva)〉という肯定を特徴とする滅。これも Dharmakīrti の示すものである。cf bhāva eva tu kṣaṇasthitidharmā vināśaḥ / (PVSV p.145,5-6 ad v.275)

[6 - 2] TS 374: 他方は〈存在の本質の壊無 (dhvaṃsa) と呼ばれる否定 (nivṛtti), すなわち単純否定としての非存在〉という否定を特徴とする滅。Dharmakīrti は、

滅を単純否定としての非存在と規定する。cf [4-2-2]

[6-1-1] TS 375：滅が刹那の間存続することを根拠に滅無因を示す

[6-1-2] TS 376:[5-1] に対する答論，刹那の間存続する滅というダルミンに関して (a), (c) の二つの立証因 (hetu) は成立する。(b) も一般的には承認される。

[6-1-3] TS 377:[5-2-1] TS 371cd に対する答論，滅の刹那の間存続する属性の故に，諸行が滅することを示す。それ故に全ての作られたもの (sarvasamskrta) は常住ではない (TS 377ab) のである。

[6-2] TS 378-381：滅は単純否定としての壊無，非存在

TS 378-380:[5-1] に対する答論

TS 378：単純否定としての非存在，無我，無自性である壊無なる滅というダルミンに関して (a) (b) (c) 三つの立証因は不成 (asiddha) である。

TS 379：滅＝非存在 (abhāva) は，単純否定 (prasajyapratishedha) であり，いかなる肯定 (vidhi) も意味しないことが示される。〈壊無が起こる (pradhvaṃso bhavati) というのは，存在が存在しなくなる (na bhāvo bhavati) ことにほかならない。pradhvaṃso bhavatiṭy eva na bhāvo bhavatiṭy ayam (TS 379ab)〉，同様のことが Dharmakīrti により示される。na bhāvo bhavatiṭy uktam abhāvo bhavatiṭy api (PVSV, v.278cd)

この点はさらに，喩例により示される。〈人に関して [比喩的に] ロバ (gardabha, bāleya) と名付けたとしても，この人にロバのあらゆる属性が結び付いてくるわけではない。(TS 380)〉 cf na hi gardabha iti namakāraṇād bāleyadharmā manuṣye 'pi samyojyāḥ / (PVSV p.146,13-14 ad v.277cd)

TS 381：壊無とは実在の自性の否定のみ (vastusvabhāvaṇiṣedha eva) で，何ら肯定されるものはない。〈滅：単純否定〉

[6-3-1] TS 382:[5-2-1] に対する答論，滅は壊無，非存在 (asattva) という点から諸行は滅することの根拠を示す

[6-3-2] TS 383-384:[5-2-2] に対する答論，仏教徒にとり無因 (akāraṇa) とは非存在 (asat) に他ならない。したがって，滅の因の作用はない。さらに滅因に作用がないことを存在 (bhāva) は滅びる性質のものか，滅びない性質のものであるか，という点から，また変化のあり方を問う点から以下のように吟味される。これは HB に範を得ている。

[6-3-2-1] 自己の因 (svahetu) から生起している存在 (bhāva) が，滅びる性質のもの (naśvara) である場合，種などが芽などを生起する場合，種などは水

などの他の因に依存するように、滅する場合にも他の因に依存する、との反論に対し最後の状態に至ったものだけが生起する自性を有するものであり、他の因に依存するのではない。それと同様に、滅する場合も他の因に依存するのではない。

cf yadi svabhāvato naśvaraḥ svātmany anavasthāyī bhāvaḥ, tasya na kimcin naśakāraṇaiḥ, tatsvabhāvātayaiva svayam nāśāt. yo hi yatsvabhāvaḥ sa svahetor evotpadyamānas tādr̥ṣo bhavati, na punas tadbhāve hetuvantaram apeksate, prakāśadvayosnakathinādi dravyavat. na hi prakāśādayas tadātmāna utpannā punaḥ prakāśādibhāve hetvantaram apeksante, (HB p. 8,7-13) ⇨ TSP pp.176, 24-177, 4

cf bijādinām aṅkurādi jananasvabhāvānām api salilādi hetvantarāpeksanāt kevalā na janayanti, tadvad bhāvo 'pi vināśe syād iti. na. tatsvabhāvasya jananaḍ ajanakas ya cātatsvabhāvāt. (HB p. 8,16-19) ⇨ TPS p.177,5-,7

[6-3-2-2] 自己の因から生起している存在が、滅びない性質のもの (anaśvara) である場合、滅の因は何の作用もなさない。反論者は堅い性質 (kaṭhinarūpa) を有する銅 (tāmra) などは滅びない性質を有するけれども火などの滅の因により変化 (anyathātva) し滅する、すなわち滅有因であると主張する。

cf sthitidharmaṇo 'pi bhāvasya nāśakāraṇaiḥ kim, svabhāvasya kenacid anyathā kartum aśakyatvāt. (HB p.18,3-5) ⇨ TSP p.177,11-12

[6-3-2-2-1] 変化 (anyathātva) とは、存在そのもの (bhāva eva) である場合、自性が生起した直後に滅しないなら、後にも自性は同一な状態に留まるから、滅の因によって何の影響も受けない。cf [4-1-1]

[6-3-2-2-2] 変化とは、存在とは別なもの (arthāntara) である場合、存在は滅びないものとしてあり、以前と全く同じ状態で存在している。したがって変化はあり得ず、銅などの喩例も不成である。cf [4-1-2]

cf tathā ca pūrvako bhāvo 'cyutidharme sthita iti na tasyānyathābhāvaḥ. etena kaṭhinādinām tāmraḍinām agnyādi bhyo dravādisvabhāvāntarotpattiḥ pratyuktā. tatrāpi pūrvakasya svarasanirodhitvād vināśe 'gnyāder upādānāc cāpara eva dravādisvabhāva utpannaḥ (HB pp.18,8-13) ⇨ TSP p.177, 20-26

[6-3-2-3] 虚空 (ākāśa) に関する論議

[7] [B] TS 385-427: 存在性に基づく刹那滅論証 (sattvānumāna)

刹那滅にあらざる常住なものは、継続的にも、同時的にも因果効力をなし得ないことを論じるに、まず継時的な場合に関しては、常住な存在が補助因に依存して継時的に結果をもたらすとした場合、補助因とは何かが問われる。すなわち補助

因とは(1)卓越性(atīśaya)を設けることであるのか、(2)単一な結果を設けること(ekārthakaraṇa)であるのか、という選択支が設けられて論議が展開される(TPS ad TS 397-399)。この点もHB(p.11*12-15)における二種の補助因の役割 atīśayaotpādana, ekārthakaraṇa⁷⁾をそのまま活用するものにほかならない。

- 1) TS, TPS のこの部分に関する研究には次のようなものがある。Satkari Mookerjee (1935): The Buddhist Philosophy of Universal Flux, Ganganatha Jha (1937): The Tattvasaṅgraha of Śāntaraksita, English Tr., 御牧克己(1984): 刹那滅論証, 講座大乘仏教9—認識論・論理学; 2) Avaloktavrata の PPrad-ṭikā D. No. 3859 Za 149b6 は, 注釈者(Vasubandhu)自身によって述べられる旨を示している。; 3) Tsoñ kha pa は, *rTsa še ṭik chen Rigs pa 'i rgya mtsho* (Sarnath, Varanasi, 1973) p. 360,3-4 で, 〈滅は有為なる特徴のものであっても, 無因であるというのは対論者の承認することに関連するものであるが, 自己(中観帰謬論証派)の学説ではない〉と Vasubandhu (経量部)及び Bhāvaviveka (中観自立論証派)の見解とは異なる旨を表明している。; 4) [A-1] [A-2] 共に次の論文に概要が示される。E. Steinkellner (1968): Die Entwicklung des Kṣaṇikatvānumānam bei Dharmakīrti, WZKS 12-13; 5) 滅因が何んらの作用もしないこと, 及び [6-3-2-2] 以下で変化と滅因の作用を問い滅無因を論じる点は簡略ではあるが, Kamalaśīla の *Madhyamakāloka* D177b6-178a2 にも見られる。6) PVSV pp. 141,17-150,5 ad v. 269-283 には次の研究がある。大前 太(1989): ダルマキールティの聖典観—『プラマーナ・ヴァールティカ』第1章および自註の和訳(7)一, 哲学年報; 7) HB における因果論の研究には, Rita Gupta (1980): The Buddhist Doctrine of Momentariness and its Presupposition, Journal of Indian Philosophy 8. 桂紹隆(1983) ダルマキールティの因果論, 南都佛教第50号

(本稿は平成11年度文部省科学研究費特定領域研究(A)による研究結果の一部である。)

〈キーワード〉 滅無因, Vasubandhu, Dharmakīrti, 中観派 *Tattvasaṅgraha*

(佛教学教授, 文博)